



米國ニ於ケル新關稅改革ノ概要(1)

津村, 秀松

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 16(1):61-79

(Issue Date)

1914-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00052149>



米國ニ於ケル新關稅改革ノ概要（其一）

神戸高等商業學校教授

津 村 秀 松

（一）

抑モ米國ニ於テハ、獨立以來（一七七六年獨立ヲ宣シ、一七八二年獨立ヲ承認セラル）英吉利トノ間ノ二回ノ戰爭ヲ初メ、諸種ノ事情ノ綜合ニヨリ、財政常ニ困難ナルニ、搗テ、加ヘテ、歐洲諸先進國ノ競爭ヲ被ムルコト、常ニ甚シカリシカバ、國庫收入主義ト、國產保護主義ト相俟ツテ、初ヨリ高率ナル關稅制度ヲ布ケリ。即チ一八一六年ニハ平均從價三割三分ニシテ、一八二四年ニハ三割七分トナリ、一八二八年ニハ四割五分トナル。然ルニ一八三三年以來、少シク之ガ緩和ニ傾キ、殊ニ一八四六年ニ於ケルウオルカーノ關稅改革ニヨリ、平均從價二割五分ニ改メラレ、次デ一八五七年ニハ、平均從價二割ニ下レリ。勿論、當時ハ歐洲諸國ニ於テモ、一般ニ自由貿易主義旺盛ノ時代ナリシカバ、斯ク遞減シ來リシ米國ノ關稅モ、之ヲ當時ノ歐洲諸國ニ比スレバ、尙ホ高率ナレド、米國トシ

テハ、前後ニ其ノ比ヲ見ザル低率ノ時代ナリキ。

サレド、ソレモ一時ノコトニシテ、間モナク、南北戰爭起リ、自由貿易主義ヲ標榜スル南部破レ、保護貿易主義ヲ主張スル北部捷チ、政權全ク北部ニ歸シタルヲ以テ、一八六五年内亂ノ終結ト與ニ、斯國ニ於ケル貿易上ノ主義政策確立シテ、復タ動カズ、保護貿易主義ハ國是トナリテ、爾來連年保護又保護ヲ重スルニ至レリ。

是レヨリ先キ、一八六一年ニハ「モーリル稅法」Morill Tariffナルモノ、兩院ヲ通過シテ、先ヅ一八四六年ノ關稅率ニ復舊セシガ、時恰モ南北戰爭ニ際シタレバ、戰局ノ進ムニ從ヒ、益々軍資ヲ要スレバ、努メテ諸種ノ内國稅ヲ増徴セシガ、之レトノ均衡上關稅ヲモ増徴スルノ必要アリタルニ加ヘテ、北部ハ豫テヨリ産業保護主義ヲ懷キ居リタレバ、勢ニ乗ジテ、戰爭中、引キ續キ、四回ノ關稅引上ゲヲ斷行シ、其局一八六四年ニハ、遂ニ平均從價四割七分六厘ニ嵩マリヌ。戰後、内國稅ハ大ニ輕減セラレタレドモ、關稅ハ少シモ輕減セラレズ、其ノ後暫クハ改革ナクシテ、一八八三年ニハ、一時平均從價三割八分マデ引下グラレタレドモ、間モナク一八九〇年ニハ、有名ナル「マツキンレー稅法」McKinley Tariff現ハレテ、平均從價四割八分六厘ニ嵩マリ、一八九四

年ノ「ウヰルソン稅法」Wilson Tariffニヨリ、四割一分七厘ニ減ゼシモ、次デ一八九七年「デングレー稅法」Dingley Tariffノ出現トナリテ、遂ニ平均從價五割四分五厘ナル未曾有ノ高稅率トナリヌ。

(一)

斯クテ米國ハ「マッキンレー稅法」ヨリ「デングレー稅法」ニ至テ、保護貿易主義ノ最高潮ニ達シ、世界各國ヲ戰慄セシム可キ保護貿易國タルニ至リシガ、斯カル「デングレー稅法」モ、其ノ效果ノ舉ガリシハ一時ニ止リ、幾何クナラズシテ、米國產業竝ニ其ノ組織ノ急激ナル進歩ト、著大ナル變遷ニ適應セザルモノ多ク、爲メニ却テ有害無益ナルモノ多キヲ占ムルノ觀アルニ至レリ。之ヲ以テ、當時ノ大統領マッキンレースラ、夙ニ之ガ改革又ハ緩和ノ必要アルヲ認メ、具體的改正意見ヲ告白セシ程ナリシガ、不幸ニシテ、間モナク、兇刃ニ斃レテ果サズ、次デル「ブズヴェルト」大統領タルニ及デ、同ジク關稅改革ノ必要ヲ認メ、殊ニ此頃ヨリ「デングレー稅法」ノ如キ、過重ニシテ而モ時勢ニ適セザル一般の保護稅制ノ結果トシテ、

(第二) 小規模ノ企業ハ、機械、原料等ノ騰貴ニヨリ、却テ非常ナル苦痛ヲ感ズル事

(第二)「ツラスト」ヲ初メ、各種企業ノ聯合ノ勃興ハ、益々市場獨占ノ暴利ヲ壟斷スルコト

(第三)從テ一般消費者ハ物價ノ騰貴ニヨリ、愈々生活ノ困難ニ遭遇スルコト
等ノ事實顯著ナルニ至リタルガ上ニ、今ヤ米國ハ昔日ノ如ク農業國ニアラズ、諸種ノ工業ノ偉大ナル發展ニヨリ、工業立國ノ傾向ヲ見ルニ至リタレバ、最早ヤ内地市場ヲ以テ足レリトセズ、之ガ確實ナル販路ヲ廣ク海外ニ求メザル可カラザルニ至リタルガ、自國ガ極端ナル保護政策ヲ採用スルノ反動トシテ、他國モ亦同ジク保護政策ヲ採用シテ以テ之ニ報イントノ傾向歷然タルヨリ、

(第四)一般輸出工業モ、亦主我一徹ナル保護制度ノ不利ナルヲ自覺スルニ至リタルコト

竝ニ「デングレ」稅法ハ、規定複雜煩多ニシテ適用容易ナラザルノミナラズ、常ニ伸縮力ヲ缺キ、諸國トノ稅率協定ノ交渉ノ如キ、殆ンド不可能ナルガ爲メ、屢々不利ナル待遇ヲ受クルヨリ、

(第五)政府ニ於テモ、臨機稅率ヲ協定シテ以テ、輸出工業ノ販路ヲ確保シ、又之ヲ

開拓シ行クノ必要ヲ感ズルニ至レルコト

等ノ事由ニ基キ、一般ニ關稅改革ノ必要ヲ認メ、稅率ヲ輕減スルノ急務ナルヲ悟レリ。

仍テ一九〇七年上院議員ビヴリツヂ Beveridge ノ改正案出デタルガ、之ハ不幸ニシテ、否決ノ運命ニ遭遇セリ。サレド之ヲ導火線トシテ、爾來、米國ニ於ケル關稅改革論ハ俄ニ勃興シ來リ、常ニ輿論ノ中心トナリヌ。之ヲ以テ、翌一九〇八年、大統領改選ノ運動ニ方ルヤ、民主黨ハ、主トシテ一般消費者ノ利害ヲ論據ニ、自由貿易主義ヲ採リ、關稅ノ上ニ、一大輕減ヲ斷行ス可シト主張シ、之ニ對シ、共和黨ハ、左迄ノ激變ヲ喜バザルモ、尙ホ一般生産者ノ利害ニ鑑ミテ、稅制ノ上ニ、根本的刷新ヲ行ヒ、一般ニ稅率ヲ輕減スルノ必要アル旨ヲ告白セリ(註一)。而シテ同年十一月ノ選舉ノ結果ハ、再ビ共和黨ノ勝利ニ歸シ、タフト大統領トナリ、上院ハ因ヨリ、下院ニ於テモ、同黨大多數ヲ制シ次デ一九〇九年三月十五日、關稅改正ノ爲メ、臨時議會招集セラル。之ヲ以テ米國關稅制度ノ上ニ、急激ナル改革ヲ見ザルマデモ、尙ホ著シキ稅率ノ輕減行ハル可シトハ、當時内外與ニ一般ニ豫期セラレタル所ナリキ。

註一 此時分ヨリ、既ニ民主黨ノ主張スル所ハ「ツラスト」ノ製品ト競争シ得可キ物品ハ、之ヲ無稅トシ、生活上ノ必需品ニハ著シキ減率ヲ行ヒ、其ノ他ノ物品ニ對シテモ、總テ收入關稅主義ニ改ム可シトイフニアリタリ。之ニ對シ、共和黨ノ主張スル所ハ、關稅ヲ内外生産費ノ差額ニ、相當ノ利潤ヲ附加シタル高ニ等シキ程度ニ止メ、且ツ其ノ種類ヲ、内國工業上ノ必要品ニ限ル可シトイフニアリタリ。由是觀之、一ハ全然自由貿易主義ヲ主張シ、他ハ尙ホ保護貿易主義ヲ固守スル點ニ於テ、相違アレド、米國ノ政界ヲ二分スル二大政黨トモニ、關稅輕減ノ必要ヲ認ムルニ至リタルノ一事ハ、當時大ニ内外ノ耳目ヲ聳動セリ。

(III)

然ルニ臨時議會開カル、ヤ、多年保護ノ恩惠ニ浴セル諸「ツラスト」ヲ初メ、企業界ニ於ケル富豪連ノ盛ナル買收運動行ハレタル爲メト、次年度ノ豫算上ニ一大缺陷ヲ發見セル爲メトニヨリ(註二)形勢頓ニ一變シテ、下院議長カンノン Cannonノ如キ、同歲入豫算委員長ペイン Payneノ如キ、竝ニ上院財政委員長オルドリッチ Aldrichノ如キ、共和黨中ノ有力ナル諸領袖打揃ツテ、關稅ノ根本的改革ニ反對シ、之ヲ改正スルノ必要ヲ認ムルモ、大體ニ於テ、現制ヲ維持ス可シト主張セリ。大統領タフトハ、斯カル姑息ナル一時的糊塗說ニ反對シ、前年ノ選舉ニ際スル公約ヲ履行セントセシモ、其ノ意見容レラレズシテ、遂ニ同年四月九日下院ヲ通過セル「ペイン案」ト、七月八

日上院ヲ通過セル「オールドリッチ法案」トノ折衷案ナルモノ、兩院協議會ニ於テ成立シ同年八月六日ヨリ實施セラフ。之ヲ「ペイン、オールドリッチ稅法」Payne Aldrich Tariff Act トナス。

註二 從來米國ハ歲入超過ヲ以テ有名ナル國ナリシガ、ルーズヴェルト大統領トナルニ及テ、其ノ帝國主義的訓策ノ下ニ、銳意海軍擴張等ヲ實行セシカバ、由テ生ゼル軍事費ノ膨脹ニヨリ、遂ニ一九一〇年ノ如キハ、無慮壹億貳千五百萬弗ノ一大不足ヲ告ゲムトスルニ至レリ。然ルニ米國ニ於テハ、關稅コソ、常ニ一大財源ニシテ、近ク一九〇三年乃至一九〇八年ノ歲入ニ徴スルニ、平均一箇年ノ內國稅收入ハ貳億四千五百萬弗ナルニ、關稅收入ハ貳億八千四百萬弗ニ上ル。サレバ所得稅相續稅等ノ新財源ヲ起ストスルモ、填補ハ主トシテ之ヲ關稅ノ増徴ニ待ザル可カラズ。之ヲ以テ此際關稅改革ヲ斷行スルモ、一方ニ於テ減率スル以上ニ、他方ニ於テ増率ヲ行ヒ、全體ニ於テ增收ヲ計ラザル可カラズトノ議論生ゼリ。臨時議會開會後ニ於ケル形勢ノ一變ハ、確ニ此事由ニモ基クナラム。サレド主タル原因ハ、相變ラズ「ツラスト」一派ノ買收運動ニシテ、偶々歲計不足ノコトアルヲ口實トシタルノ傾向ナキニシモアラズ。

然ラバ「ペイン、オールドリッチ稅法」ノ内容如何ントイフニ、從來ノ關稅法ニ劣ラザル詳密ナル規定ヲ設ケタレドモ、一二ノ事項ヲ除クノ外、大體ニ於テ「チングレー稅法」ト異ナル所ナシ。即チ舊法ト異ナルトコロハ新ニ（一）複關稅法ヲ採用セルト、（二）フヰリツピン^{Wine}トノ間ノ關稅ヲ全廢セルトノ二點アルノミ。勿論此外、稅率ニ關スル變更アリテ、奢侈品ニ就テ稅率ヲ引上ゲ、日用品ニ就テ稅率ヲ引下ゲ、一般ニ稅率ヲ

輕減セシトイフト雖モ、尙ホ平均從價四割一分二厘ノ高率ニシテ、之ヲ「マツキンレ
ー稅法」ノ平均從價四割八分六厘、「デングレー稅法」ノ同五割四分五厘ナルニ比スレ
バ、少シク輕減サレタルガ如クナレドモ、之レ表面上ノ體裁ニ止リ、其ノ實新關稅法
ニ於テハ、巧ニ稅目ノ編成ヲ改メ、減率ヲ裝ヒ、主要ナル稅目ニ就テノ減稅ヲ避ケタ
ルヲ以テ殆ンド關稅輕減ノ實ナキナリ。加之、一九一〇年三月三十一日ヨリハ、此ノ
如クシテ新ニ制定セル稅率（即チ關稅法第一章ニ規定セル稅率）ヲ以テ最低稅率トナシ、之ニ從價二割五
分ヲ加ヘタル稅率ヲ以テ最高稅率トナシ、大統領ニ於テ、米國又ハ米國品ニ對シ、特
ニ不利益ナル待遇ヲナサルモノト認メタル國ニ對シテノミ、最低稅率ヲ適用ス
可ク、又大統領ニ於テ之ガ適用ヲ取消ス旨宣言スルトキハ、宣言後九十日目ヨリ最
高稅率ヲ適用ス可シト規定ス（第二章）。而シテ「フヰリツピント」ノ間ニ自由貿易ノ制ヲ
布キ、雙方互ニ自國產ノモノ、又ハ全價格ノ八割以上自國產ノ原料ヲ用キタル製造
品ニシテ、直接ニ輸入サレタル場合ニハ、一切輸入稅ヲ課セズト定メ、但シ米穀、砂糖、
煙草ハ一箇年ノ輸入額三十萬噸以上ナルトキ、其ノ以上ノ部分ニ對シ、輸入稅ヲ課
スト定メタリ（第五章）。此外輸入獎勵金ニ對スル相殺關稅ニ關スル規定（第六章）。獸疫豫防

ニ關スル規定(第十二章及第十三章)監獄製品ノ輸入禁止ニ關スル規定(第四章)輸入貨物積載船舶ニ關スル制限(第十六章及第十七章)造船材料輸入ニ關スル規定(第十九章及第二十章)戻税ニ關スル規定(第二十三章乃至第二十六章)等、重要ナル規定アレド是等ハ皆、デングレー税法ノ規定ニ同ジ。

(四)

由是觀之、「ペイン、オールドリツチ税法」タル時勢ノ急務ニ應ジ、臨時議會マデ招集シテ、前後四箇月半ニ亘リ、審議ニ審議ヲ重テタルモノナレドモ、最後ニ至ツテ決定セル所ハ、別ニ根本的改革アルニアラズ、「デングレー税法」ノ上ニ多少ノ取捨ヲ施シ、平均税率ニ於テ幾分ノ輕減ヲ示スガ如キ體裁ヲ造リタルニ過ギザルモノナルニ、之ニ加フルニ、複關稅法ヲ以テセシカバ、愈々世界無比ナル保護貿易國トナリ、内外ヲ通ジテ、豫期ニ反スルコト著シ。於是乎、外ハ露西亞、加奈陀及ビ獨逸等トノ間ニ於ケル條約ノ改締ニ就キ、幾多ノ波瀾ヲ起シ、佛獨トハ相變ラズ不完全ナル最惠國條約ヲ締結スルニ止リ、露西亞及ビ加奈陀トハ、遂ニ無條約國タル關係ニ陷レリ。又内ハ中産者以下ノ不平ヲ買ヒタフト竝ニ共和黨ノ反信ヲ責メ、之ニ對スル不信任ノ聲、日ニ益々高カラントスルニ搗テ、加ヘテ、近年此國ニ於ケル一般ノ物價騰貴著シ

ク、大約、左ノ如キ卸賣相場ノ暴騰ヲ見ルニ至レリ。

商 品	一八九七 年ノ相場	一九〇〇 年ノ相場	一八九七年以來 ノ騰貴ノ割合	一九一〇 年ノ相場	一八九七年以來 ノ騰貴ノ割合
農 產	八五・二	一〇九・五	二八・五	一六四・六	九三・二
食 物	八七・七	一〇四・二	一八・八	一二八・七	四六・七
衣 服	九一・一	一〇六・八	一七・二	一二三・七	三五・八
金屬及器具類	八六・六	一二〇・五	三九・一	一二八・五	四八・二
藥材及化學製品	九四・四	一一五・七	二二・五	一一七・〇	二三・九
家 具	八九・八	一〇六・一	一八・一	一一一・六	二四・二
雜 品	九二・一	一〇九・八	一九・二	一二三・一	四四・五
平 均	八九・七	一一〇・五	二三・一	一二一・六	四六・七

(備考) 上表ハ The Report of the Ways and Means Committee of the House of Representatives, April, 22nd 1913 ニヨル

卸賣相場ノ騰貴、斯クノ如クナレバ、之ニ伴フテ、小賣相場ノ騰貴、更ニ一層甚シク、昨年六月十五日、同國勞働局ニ於テ、全國四十箇ノ都市ニ就キ、調査セル小賣相場ヲ、過グル一八九〇年乃至一九〇〇年ノ十箇年間ノ平均相場ニ比スルニ、平均約六割ノ騰貴ヲ示ス。其ノ詳細左ノ如シ。

豚 肉	一・一〇	豚 脂	六・六五
燻製 ハム	八・四〇	腰 肉(牛)	七・五二
鹽 豚 肉	一二・八五	ロース(牛)	七・五〇

小麥粉	二・八六	牛乳	三・八四
コーンミール	五・七三	バター	四・一三
馬鈴薯	四・四四	鶏肉	七・六八
鶏卵	四・〇八		

勿論、物價ノ騰貴ハ、近年、各國ニ於ケル一般ノ現象ニシテ、獨リ米國ノミニアラザレドモ、特ニ米國ニ於ケル騰貴ノ割合、最モ甚シキハ、一九一三年八月十一日、英國商務院ガ新ニ發表セル、左ノ各國小賣相場比較表ニ於テ明カナリ。

	一九〇〇年	一九〇五年	一九一一年
英吉利 (倫敦)	一〇〇	一〇三	一〇九
奧太利 (ヴィエナ)	一〇〇	一〇八	一二八
匈牙利 (二十二市)	一〇〇	一二二	一三七
白耳義	一〇〇	一二〇	一二八
佛蘭西 (巴里)	一〇〇	九七	一二七
獨逸 (フロシヤ、ハバリヤ、バーデン、ウヰルテンベルヒ)	一〇〇	一二四	一二八
和蘭	一〇〇	一〇二	一二七
諾威 (クリスチヤニヤ)	一〇〇	一〇〇	一一一
米國 (三十九市)	一〇〇	一一三	一三九

(備考) 前表ハ The Board of Trade Reports on the Working Class Rents and Retail Prices in 1912 ナル。

斯クテ、近年ニ至リ、特ニ米國ニ於ケル物價騰貴ノ甚シク從テ又一般ニ生活ノ困難

著シキヲ加フルニ至レルハ全ク此間ニ於ケル保護政策ノ増長殊ニ之ヲ緩和スル能ハザリシ「ペイン、オールドリッチ稅法」ノ罪ニ在リトシ、民心漸ク共和黨ヲ離ル。

加之、一九一一年秋以來、諸種ノ關稅改革案下院ヲ通過セシカド、共和黨尙ホ多數ヲ占メタル上院ニ於テハ、常ニ否決若クハ修正セラレ、偶々上院ヲ通過セシモノト雖モ、大統領タフトハ、一切之ヲ認可セザリキ。於是乎「ツラスト」ヲ初メ企業界ニ於ケル富豪ト結託セル共和黨ニシテ、政權ヲ掌握スル間ハ、民意ニ根本的關稅改革到底行ハレザル可キコト、益々明瞭トナリタルヲ以テ衆望愈々共和黨ヲ離レ、民主黨ニ歸スルニ至リス。

(五)

是レヨリ先キ、一九一〇年十一月、タフト在職中ニ行ハレタル下院ノ總選舉ニ方ツテ、全然共和黨ノ大敗ニ歸シ、間モナク上院ノ三分ノ一改選ニ於テモ、民主黨ノ勝利ニ歸スル者多ク、遂ニ上下兩院共ニ、民主黨ノ爲メニ多數ヲ制セラル。次デ一九一二年秋、大統領改選ノ結果モ、亦民主黨ノ大捷ニ歸シ、ウヰルソン Wilson 大統領トナル。之ヲ以テ、多年米國朝野ノ宿題タリシ關稅制度ノ一大改革ハ、民主黨ノ黨綱ニ從

ヒ、新大統領就任匆匆實現セラル可シトハ、一般經濟界ノ期待セル所ナリキ。

果然、米國下院歳入豫算委員會ニ於テハ、昨年（一九一三年）一月中、廣ク當業者ニ對スル

關稅改正意見聽取ヲ終了シタル後、委員長アンダーウード、Underwood 主宰ノ下ニ、改正案編成ニ着手シ、三月中之ヲ完成シ、該草案ハ大統領ウヰルソンニ内示シ、大統領ハ上院財政委員會長シモンズ、Simmonsノ意向ヲモ徵シ、調査研究ノ上、幾分ノ修正ヲ加ヘ、其ノ結果同年四月七日、臨時議會ヲ招集シテ、關稅改正案ハ、前記アンダーウードヨリ、先ヅ下院ニ提出セラル。仍テ下院ハ之ヲ直ニ歳入豫算委員會ニ附託セラレタルガ、該委員會ハ、同月二十二日、原案ノ儘、之ヲ可決セル旨ヲ、本會議ニ報告シ、爾來、下院ニ於テ連日討議シ、少シク修正ヲ加ヘタル後、五月八日、百三十九票ニ對スル二百八十一票ノ大多數ヲ以テ、之ヲ可決シ、上院ニ回附セリ。之ヲ下院案トナス。而シテ上院ニ於テハ、之ヲ上院財政委員會ニ附託ス。上院委員會ハ、下院ト大體同一ノ主義方針ヲ奉ジタレドモ、尙ホ逐條審議ノ結果、合計六百七十六箇所ニ亘ル大修正ヲ施シテ、別ニ一案ヲ作り、六月十一日、之ヲ委員長シモンズヨリ、上院本會議ニ報告セラレ。上院本會議ニ於テハ、之ニ對シ僅少ノ修正ヲ施シタル上、九月九日、之ニ就テ決ヲ

採リ、結局三十七票ニ對シ、四十四票ノ多數ヲ以テ、之ヲ可決ス。之ヲ上院案トナス。斯クテ、上下兩院多少意見ヲ異ニスルニ至リシカバ、更ニ各院七名ノ委員ヨリ成ル兩院協議會ノ議ニ附シ、兩案ニ就キ相互交讓ノ上、九月二十九日、妥協案成立ス。而シテ該案ハ、上下兩院ニ各報告セラル、ヤ、何レモ其ノ儘無事ニ通過セシカバ、十月三日、大統領ノ裁可ヲ經、翌四日ヨリ直ニ實施セラル。是レ即チ現行ノ新關稅法ニシテ所謂「アンダーウード・シモンズ稅法」[Underwood-Simmons Tariff Act]ナルモノ是レナリ。本法ニ關スル原案ガ、昨年四月七月初テ下院ニ提出セラレテヨリ以來、約六箇月ヲ經テ、茲ニ成立スルニ至リシモノトス。

(六)

斯クテ米國ノ新關稅法ナルモノハ、最初、主トシテアンダーウードノ考案ニ基ク下院案ナルモノニ發シ、次デ之ヲ修正セルシモンズノ上院案ナルモノ生ジタレバ更ニ兩院協議會ニ移リ、依テ生ゼル折衷案ニ成リタルモノナリ。仍テ今ヨリ進ンデ、新關稅法ノ要點ヲ述ベンニ、説明ノ便宜上、之ヲ二大別シテ、(一)關稅定率ノ改正ト、(二)關稅行政ノ改革ニ分チ、其ノ内、先ヅ最初ニ專ラ關稅定率ノ改正ニ就キ、其ノ大要ヲ

述ベントス。

扱、今回ノ關稅改革ニ關スル根本的の方針ヲ窺フニ、ソハ全ク關稅改革ニ關スル民
主黨多年ノ政綱ニ基クモノニシテ、今回下院歳入豫算委員長アンダーウードガ、稅
率編成ノ要義トシテ宣言セル『競爭關稅ニヨル收入主義』ナル數語ニ盡ク『競爭關稅』
Competitive Tariff トハ、同種ノ貨物ニ就キ、内國産業ト外國輸入トヲシテ、常ニ對等ニ競
爭セシムル程度ヲ限り、賦課スル關稅ノ謂ニシテ、從來、米國ノ關稅タル、皆此程度ヲ
超ユルモノナリシカバ「ツラスト」ノ勃興ヲ促シ、市場ノ獨占ヲ起シ、物價ノ暴騰ヲ起
シ、生活ノ困難ヲ起シタル次第ナレバ、今回ハ之ヲ總テ競爭關稅タル程度マデ引キ
下ゲ、之ニ依テ、一面、内國産業ヲ破壊スルニ至ラズシテ、而モ能ク「ツラスト」ノ横暴ヲ
制シ物價ヲ低廉ナラシメ得ルト同時ニ、他面、國庫ハ稅率ヲ輕減スルモ、尙ホ能ク輸
入ノ増進ニヨリ、適度ノ關稅收入ヲ得可シトイフニ在リ。

斯カル方針ニ基キ制定セラレタル新關稅法中、關稅定率ニ關スル改正ノ要點ヲ
摘錄スレバ、大要左ノ如キモノアリ。

第一、食料品ヲ初メ、日用品ハ多ク無稅トナシ（例令麵麴、ビスケット、小麦、小麥粉、肉類、鹽、牛乳、鶏卵等ノ如キ）然ラザル

モノモ之ニ對シテ極度ノ減稅ヲ行ヒシガ(例令毛絲ハ從價八割ナリシモノナ一割八分ニ、機寸ハ
 ナニ割三分ニ、米ハ五割四分ナリ)、之ニ反シ、奢侈品ニ對シテハ、減稅ノ率ヲ輕クシ、中ニハ
 シナ三割三分ニ減稅セルガ如キ)、却テ増率セルモノアリ、(例令、酒類、煙草、刺繡製品ノ如キ、上等品ナラザルモノハ、幾分減率セシモ上
 價一割ノ課稅ヲ見
 ルニ至レルガ如キ)

第二、原料品ニ就テモ亦大ニ無稅品ヲ加ヘ(銑鐵、鐵板、石炭、「コークス」、「セメント」、然
 ラザルモノモ、著シク減率ヲ行ヒ、又製造品中、軌條、裁縫機械、「キヤツシユ、レジス
 ター」、「タイプライター」製靴機械等ノ如キ、獨占的商品ニ就テハ、新ニ之ヲ無稅品
 目ニ加ヘタリ。

第三、砂糖ハ一九一四年(本年)三月一日マデ、從來ノ通り、從價四割八分五四ノ割
 合ニテ、徵稅スルモ、同日ヨリ、從價三割六分二五ノ割合ニ減稅シ、更ニ一九一六
 年五月一日以降、全然之ヲ無稅ニ改ム(註三)、粗製羊毛モ亦一九一三年十二月一
 日マデ、從來ノ通り、從價四割三分六一ノ割合ニテ徵稅スルモ、同日ヨリ、之ヲ無
 稅トナス可ク、羊毛製品モ亦一九一四年一月マデ、舊稅率ニヨリ、其ノ以後、新稅
 率ニヨルコト、ス。之ハ是等砂糖、羊毛、羊毛製品ノ減稅又ハ無稅ニ付キ、西南諸

州選出民主黨議員及ビ布哇、フヰリッピン等ノ當業者ヨリ最モ強硬ナル反對アリタルヲ以テ、斯ク減稅又ハ無稅實施ノ期日ヲ特ニ幾分延期シタルナリ。

第四、食料品及ビ原料品免稅又ハ減稅ノ結果、自カラ農產物中無稅又ハ輕稅トナリタルモノ多ケレドモ、同時ニ農用機械具等ニ對シ免稅又ハ減稅シタルモノ多ケレバ、彼レ是レ相俟ツテ、農業ノ安全ト發達ヲ企圖セリ。

第五、從來、米國ハ他國ニ比シ、從價稅主義ニ傾ク國ナリシガ、今回ハ、更ニ一層廣ク從價稅主義ヲ採用スルニ至レリ。

第六、新關稅法ノ平均稅率ハ、從價二割七分ニシテ、之ヲ舊關稅法タル「ベイン、オルドリツチ稅法」ニ比スルニ、三割三分餘ノ減率ニ當ル。

註三 今回ノ關稅改革ニ於テ、「ツラスト」征伐ノ跡、最モ著シキハ、前記無稅品又ハ減稅品ノ種類ヲ一見スルニ於テ、自カラ首肯シ得可ケレド、就中、砂糖ノ輸入稅ヲ撤廢セル一段ニ至ツテ、其ノ趣旨、最モ著シク現ハル、ハ、注自ス可キ所ナリ。砂糖ハ日用品ナルガ故ニ、從來、米國民ハ彼ノ砂糖「ツラスト」ノ爲メニ苦シメラレタルコト尠少ナラズ。民主黨ハ夙ニ是ニ見ル所アリタルガ故ニ、西南部諸州選出ノ同黨議員ノ強硬ナル反對アリタルニモ拘ラズ、斷然、之ヲ無稅トスルノ方針ヲ改メザリシナリ。

(七)

斯クテ、箇々稅目ニ於テハ、増減一ナラザレドモ、増率セルモノハ、僅少ニシテ、減率セルモノハ、多大ナルガ上ニ、一般ニ稅率輕減ノ程度著シク、中ニハ、全ク無稅トナリシモノモ、亦少ナカラザルヲ以テ、全體ニ於テ、關稅收入ノ上ニ、大ナル減收ヲ期セザル可カラズ。之ヲ以テ之ガ補充ノ方法トシテ、新ニ年額參千弗以上ノ純收入ニ對シ百分ノ一乃至四ノ割合ニヨル所得稅ヲ新設スルコト、セリ。大藏當局者ノ計算ニヨレバ、新法ニヨリ、課稅セラル可キ所得者數ハ、四十二萬五千ニシテ、所得稅額ハ、八千貳百貳拾八萬九千弗ニ達ストイフ。其ノ詳細ハ左ノ如シ。

所 得	額	被課稅者數	稅 額
三、〇〇〇乃至	五、〇〇〇 _弗	一二六、〇〇〇	六三〇、〇〇〇
五、〇〇〇乃至	一〇、〇〇〇	一七八、〇〇〇	五、三四〇、五〇〇
一〇、〇〇〇乃至	一五、〇〇〇	五三、〇〇〇	四、二四〇、〇〇〇
一五、〇〇〇乃至	二〇、〇〇〇	二四、〇〇〇	三、一八五、〇〇〇
二〇、〇〇〇乃至	二五、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一、一〇〇、〇〇〇
二五、〇〇〇乃至	五〇、〇〇〇	二一、〇〇〇	九、六六〇、〇〇〇
五〇、〇〇〇乃至	七五、〇〇〇	六、一〇〇	六、三三二、〇〇〇
七五、〇〇〇乃至	一〇〇、〇〇〇	二、四〇〇	四、七七六、〇〇〇

一〇〇、〇〇〇乃至	二五〇、〇〇〇	二、五〇〇	一三、七七五、〇〇〇
二五〇、〇〇〇乃至	五〇〇、〇〇〇	五五〇	八、八〇五、五〇〇
五〇〇、〇〇〇乃至	一、〇〇〇、〇〇〇	三五〇	一三、六五三、五〇〇
一、〇〇〇、〇〇〇以上		一〇〇	九、三〇一、〇〇〇
合 計		四二五、〇〇〇	八二、二八九、〇〇〇

此外、法人所得ニ對スル稅額約參千九百萬弗ニ上ルベケレバ、總收入ハ壹億貳千百萬弗以上ニ達スルナラントイフ(註四)。由是觀之、新關稅法ハ、主トシテ貧者ノ負擔ヲ增加ス可キ關稅ノ輕減ニヨル收入ノ減少ヲ主トシテ富者ノ負擔ニ歸ス可キ所得稅ノ徵收ニヨリ補充セントスルモノニシテ、近時歐米諸國ニ漸ク盛シナラントスル民主的思想ノ最モ著シキ表徵ノ一ナリト謂フ可シ。(未完)

註四 The Economist, No. 3861.

正誤

前號第十五卷第六號論說欄「支那關稅增徵問題」中「子口半稅」トアリシハ「子口半稅」ノ誤植ニ付訂正ス